「古典はおもしろい」

――中学二年生の授業より――

九野里信夫

〔1〕はじめに

一九九五年度の一学期。西行の短歌を一文字ずつ読みあげる教師の言葉を、中学二年生の生徒たちはまずひらがなで書きとってゆく。聞き書きしたひらがなを、学習班の中で相談しながら漢字化し、その漢字とかなを根拠にしながら、生徒は古典を文学作品として読解してゆく。

有間皇子の短歌についても生徒は同じような取り組みを行い、飛鳥時代の人間の生活背景に寄り添いながら、短歌にこめられた形象を読解しはじめる。さらに、「枕草子」の授業では、「うつくしきもの」の段を絵画化し、「うつくしきもの」の共通点を読みとり、やがて古典作文へとすすんでゆく。

個人や班での朗読や暗誦を授業の基本に据えながら、古典作品を文学教材と位置づけて取り組んだ中学二年生の授業の中で、生徒たちは次のような感想を提出してくる。

〔2〕生徒の授業感想より

A　むずかしいけど、古典の授業はおもしろい。

B　古典は楽しい。とても分かりやすい。

C　とても集中できる授業でよく頭を使う。

D　（授業での）話し合いがたのしい。

E　古典といふもの色々な言葉ありていとをかし。我、古典の授業は好きなり。

F　古典に使う漢字は、あまり分からないけど、昔の人の心境などが読めて、とても楽しいです。それとぼくは、歴史が好きだから、とてもうれしいです。

G　古典の授業はいろいろわからない言葉を調べていくのが楽しかった。「枕草子」がとくによかった。

H　古典作文はおもしろいけど、自分で書くとむずかしい。けれど、人のをよむことはおもしろかった。

I　国語のことだけではなく、歴史のことも学べるのでいいと思う。

J　国語でならうと初め難しいと思うが、けっこうなじみがあって生活の近くにあるというような気がします。たとえば時代劇、おじいちゃんもぼくも好きでよく見ますが、言葉に「ぎょ意」とか、「あいわかった」の「あい」とか、「まかりならん」など、古典も今でもしたしみのあることが実感できます。

K　うらよみがとくにおもしろい。

L　少しむつかしいがなれてきた。古文作文など、おもしろいことなどをとおして、古典がよくわかるようになってきた。授業は楽しい。国語の「勉強をしよう」という意欲がでるかんじ。

〔3〕

家にあれば笥に盛る飯を草枕　旅にしあれば椎の葉に盛る　の授業

※Tは教師の指導言、SSは生徒の一斉言、S①～㉚は個別生徒の発言、S数は数人の生徒の発言を示す。

板書　「有間」

T　何と読むの？

SS　ありま。

板書　「有間皇子」

T　何と読む？

SS　ありまおうじ。

T　おうじ？これ以外の読みは？

S①　みこ。

T　そう。今の誰が言ったの？

〔S②がうれしそうに手を挙げている〕

みこというのは、どんな位？

T　皇太子、天皇の子供。

S数　有間皇子は、何時代の人？

T　平安時代。

S③　そんな時代？

T　奈良。

S④　奈良より前は？

T　飛鳥。

SS　そう飛鳥時代。

T　「六五八年」

板書　六五八年というと、大化改新より前？後？

T　後。

SS　大化改新は何年？

T　六四五年。

S数　そうやね、この前ちょうど、歴史の授業で習ったとこやね。

T　この六五八年は大化改新より一三年後やね。

板書　「一一月一一日」（有間皇子が亡くなった日）

T　一一月一一日というと何の日？

SS　……（無言）

T　わからんね。では、これはちょっと置いておこう。S⑤、一一月というと、今では、いつの季節？

S⑤　（ちょっと迷いながら）冬。

T　そう、そのとおり。それでは、ノートのつづきに、有間皇子の短歌を書いて行きます。先生が口で言うことばをひらがなで書いて行って下さい。聞く力も大切。聞きとれなかった人は、待っていて下さい。

い・え・に・あ・れ・ば
け・に・も・る・い・ひ・を
く・さ・ま・く・ら
た・び・に・し・あ・れ・ば
し・ひ・の・は・に・も・る

〔一字ずつ区切りながら、ゆっくりと二回通読する。生徒は五首めの短歌ということもあり、聞き書きには慣れてきている。聞き落としたところは、班内で見せあっている。二回通読した後で、すべてひらがな書きの短歌を板書する。生徒は、ノートと黒板とを見くらべている。〕

T　では、歴史的仮名づかいのことばは、いくつある？どの班が早く見つけられる？

三班のS⑥が最初に挙手。

T　はい、三班が早い。三班のS⑥。

S⑥　「いひ」の「ひ」と、「しひ」の「ひ」の二つ。

T　なるほど。これらは、今のことばでは、何と発音するの？

S⑥　「い」

T　そのとおりやね。それでは、誰かにこの短歌をよんでもらおう。では、S⑦。

〔S⑦は、Tの指先の動きを追って板書された五行をよんでゆく。〕

それでは、全員でよんでゆこう。背中を伸ばして、口をあらかじめモゴモゴさせて、口を動かしやすいようにしておいて。

〔一、二、三行と生徒たちは大きな声でよんでゆく。しかし、二人ほどの生徒が声を出していない。〕

はい、ちょっとストップ。四班によんでない人がいるよ。

〔この時、「おいーっ」と、四班を見て他の生徒たちが言う。〕

はい、もう一度。

〔生徒は、前よりも大きなしっかりした声で五行を読みきる。〕

T　それでは、この短歌（のひらがなは）、いくつ漢字に直せるか？漢字に直せるところには――線をひいて。八つ線が引けた人は手を挙げて？

〔三〇秒後〕

S⑧　先生、まちがっていてもいいですか？

T　いいよ。まちがえないと、授業でまちがえないと、力はつかないよ。

〔S⑧は黒板のところへ出て来て、十ヶ所に――線を引く。S⑨は、さらに三ケ所に――線を付け加える。S⑨は、四行目の「し」にも――線を引いた。〕

T　S⑧、S⑨に反論はないか？

T　反論はないね。S⑨の引いた四行目の「し」は、漢字に直せる？

SS　……（無言）。

T　この「し」も、飛鳥時代には漢字で書いた。いや、全部漢字で書いた。それは、なんで？

S⑦　ひらがななかったから。

T　そう、そのとおり。ひらがななかった。ひらがなは、いつできたの？

S数　平安時代。

T　そう、そのとおり。この「し」も飛鳥時代には漢字で書いた。ただし、この「し」は今は漢字に直さないのがふつう。S⑧、S⑨が――線を引いた「け」、「いひ」、「しひ」には、‖線をつけておく意味がある。（現代語訳する時にポイントになってくることば）それでは、十二個の――線をひいたことばのうち、二分間でいくつ漢字に直せるか？　班長は二分後に、各班の最高（数）と、最低（数）とを発表して下さい。ただし、十二個全部漢字に直すはの無理だろう。（隣の）二年B組でも無理だった……。

〔（二分後、各班の班長は最高数と、最低数を確認し、Tに）報告する。

	最高	最低		最高	最低
1班	（12）	（9）	5班	（9）	（9）
2班	（11）	（11）	6班	（10）	（8）
3班	（12）	（12）	7班	（11）	（9）
4班	（10）	（9）			

〕

T　1班と3班は本当に12個全部漢字に直せたの？

S⑩　先生、1班は12個を11個に変えて下さい。まちがいでした。

〔S⑩は班長〕

S数　エーッ、なんエーッ。（他の班から非難の声があがる）

T　では、3班、だれか黒板のところへ出て来て、12個の漢字を書いて下さい。

〔S⑨が出て来る。S⑨が漢字を一字書くごとに、「この漢字についての反論は？」と聞いてゆく〕

板書

家　有
いえにあれば
器　盛　飯
けにもるいひを
草　枕
くさまくら
旅　有
たびにしあれば
椎　葉　盛

しひのはにもる

〔S⑨が「有」と書いたところで、S⑪の手が挙がる。〕

T　では、S⑪、書きに来なさい。

〔S⑪は、「在」と書く。「在」についての反論は出ない。S⑨、S⑪の書いた「有」も「在」も、両方とも考えられることを確認する。S⑨が漢字を書き終えると、まわりの生徒たちから、「スゴイ」、「完全に漢字にはまってる」という声が出される。〕

T　S⑨、⑪、ごくろうさん。12個すべて漢字に直せたが、もう反論はない？

SS　……（無言）。

T　この「け」は、やっぱりむずかしい。しかし、S⑨の書いた「器」は、「け」が「食器」という意味をあらわすことを考えたうえで出て来た漢字。ただし、「器」は「け」とは発音しない。S⑨の「器」は、言葉の意味をよく考えている、良いまちがい。まちがいは大切。ただし、字はちがう。むかし、食器は何で作ったろう？

S⑫　青銅。

S⑬　木。

S⑭　石。

S⑮　草。

T　中国に古くからある植物というと？

SS　……（無言）

「古典はおもしろい」

板書　「竹」

板書　「笥」

T　竹で作った入れ物を「笥（け）」と言った。ただし、有間皇子の時代では食器は何でできていたと思う？

S⑯　青銅。

S⑰　鉄。

S⑱　土。金。

T　それ以外で、身分の高い人間として考えられるのは？

S⑲　銀。

T　そう、銀の食器だという説がある。

この後、教師が口頭で言う現代語訳を、生徒たちはノートに聞き写しする。この短歌は生徒に現代語訳させていない。西行の短歌、「枕草子」の「うつくしきもの」などは生徒が直接、辞書をもたずに、クラス集団の中で現代語訳してゆくが、この短歌は教師の訳をそのまま聞き写しさせた。

T　プリント（Ⓐ）をわたすから各班1人来てほしい。早い班は？

〔各班の生徒が教卓のところへ駆けこんでくる。〕

まず飛鳥時代の人の着ているものを見てもらいたい。この絵は誰が書いたかわかる？

S⑳　赤塚ふじお。（笑声）。

S㉑　石森章太郎。

T　そう、そのとおり。図書館に二〇巻以上そろっている歴史マンガの中のひとつ。帽子をかぶり、刀をさして、靴をはいている。この靴は先がとがっている。流行に詳しい人は、こんな形の靴が今はやっているの、知っているかな？女の人は何もってるの？

S数　うちわ。

T　では、右下の人は、何持ってるの？

S数　酒。

T　酒？

S数　さかずき。

T　そう、酒の入っているさかずきやろうね。その次のところで、「兄の大王（だいおう）は――」と書いてあるが、昔は大王（だいおう）を何とよんだの？

S数　おおきみ。

T　そう、そのとおり。その下の絵、昔もおべっかつかう人はいたんやね。「へへ、まあ、いっぱいどうぞ」と。こんなもので酒をついでいる。その左の絵で、お盆のようなものの上にのっていて、料理を盛ってあるのが？

S数　笥（け）。

T　そうやね。それでは、その上の絵を見てゆこう。左の下の方から料理を見てゆこう。「エビカツラ」の下の漢字（葡萄）は何て読むの？絵からも考えて。

S数　ぶどう。

T　そう、その下（瓜）は？

S数　うり。

T　そう、ぶどうとうりのデザートやね。その上の漢字は？

S数　かいそう

T　では、その上の、コンデンス・ミルクの右に書いてあるこの漢字は何て読むの？

板書　酥

S㉒　す。

S㉓　さけ。

T　いいや、ちがう。君らが去年の秋、校外学習で行った飛鳥寺の前の店には売っていたよ。飛鳥寺の近くの店でおじさんから瓢箪を買った人が何人もいたけれど（「清兵衛と瓢箪」に興味をもった生徒が何人も瓢箪を買っていた）、その隣の店で売っていたのに気付いていたかな？

S㉔　そ。

T　そう、そのとおり。その上にいくと、「はし」があり、「盃（さかずき）」があり、「コイの片身」があり、「イノシシの肉」があり、その右のものは、何て読むの？

S㉕　だくしゅ。

S㉖　だくざけ。

S㉗　にごりざけ。

T　そう。今言ったの誰？

S㉗が、にこにこして手を挙げている。

T　S㉗は酒にくわしいね。（笑声）「モチイイ」があり、「トリ肉の蒸焼（むしやき）」に、その右の字（醤）は何て読むの？

S㉘　しょうゆ。

T　しゅうゆ、なるほど。この字は、音読みでしょうと読む。しかし、今のしょうゆのことではない。日本に古くからある調味料は？

S㉙　ソース。（笑声）

S㉚　ケチャップ。（笑声）

T　日本に昔からあるケチャップにかわるものと言ったら？

S㉗　みそ！

T　そのとおり。S㉗は、お酒にも、食べ物にもくわしい。（笑声）それでは（プリントを）裏返して、これは何の絵？（プリントⒷ）

S数　椎の葉。

T　この椎の葉の上にのっているのが？

S数　飯（いい）（問答に答える生徒の数はしだいに増えてくる）

T　そう、そのとおり。それでは、この絵の横に、「椎の葉に盛る飯」と書いて下さい。（生徒は絵の横にメモしている）

T　それでは、この短歌を見て何かおかしいこと、不自然に思うことはないか？

S㉕　皇子なのに、椎の葉なんかでごはんを食べているのはおかしい。

T　なるほど。他には？

S㉘　こんなふう（椎の葉の上にごはんをのせるの）だったら、ごはんがこぼれるはず。

T　そうや、そのとおり。でも、なんでごはんがこぼれへんの？

S㉘　ごはんが（今のものより）かたいから。

T　そう、S㉘の言うように、古典に出てくるごはんは、今のものよりかたいものがあった。それをこう書く。

板書　強飯。

T　何と読む？

S数　ごうはん。（笑声）

T　いまでも京都では、ごはんのかたいことを、このように言うよ。これで何と読む？

板書　強い。

S数　こわい。

T　そう、そのとおり。これで強飯（こわいい）と読む。

〔4〕旅のうたの裏側には？

何気なく読んでしまうと、中学二年生では「旅に出て、いつもは食器に盛るごはんを、椎の葉に盛った」というだけの意味にしか読み取れないことが多い。S㉕の言った、「皇子なのに、椎の葉なんかでご飯を食べているのはおかしい」という疑問を手がかりにしながら、この短歌にこめられている謎や心情を読みすすめてゆく。短歌や小説の表面だけの意味にとらわれずに、その裏側にこめられている意味を読みぬくことを、生徒たちは「裏読み」

とよんでいる。

生徒にこの短歌にこめられた心情を問いかけると、「旅の短歌だから、明るい心情をよんでいる。」という生徒と、「皇子がわざわざ椎の葉でごはんを食べるのはおかしい。もっと豪華な食事をするのはずなのに……。暗い気持ちがこめられている」という生徒とに二分される。「明るい」派と、「暗い」派に教室が分かれて、議論が起こり出す。「明るい」派は、「旅は、この時代でも、やっぱり（人々の）楽しみやったと思う」、「旅に出たときに、椎の葉にごはんを盛るのが楽しみやったと思う。」と主張する。一方「暗い」派は、「家にいたら笥で食べるのに、家ではないので笥で食べられないのだから、（皇子の気持ちは）暗い」、「ふつうは、家来もいて、器もあるはずなのに、椎の葉しか（自分の身の回りには）ないのだから、くらい」と主張する。それに対して「明るい」派は、「今までの生活とちがう感じを楽しむのが旅やから、椎の葉でごはんを盛るのも楽しかったはず」と譲らない。

〔5〕 自分の読解をノートに

S㉛は、「旅にしあれば」を根拠にしながら「しという（言葉）には自分の強い願いが表れている。旅に出ないと椎で飯を盛ることは出来ないので、旅に出て自分の願いがかなったので明るい。マンガとかでも、身分の高い人が身分の低い人のしていることがしたくなったりすることがあるので、この有間皇子は身分の低い人がすることの多い旅ができてうれしい。」さらに「家に在れば」を根拠にして、「家にいたらこんなことはできないということで、（今は家にいないから）できて明るい」と、ノートにしるす。S㉜は、「椎の葉に盛る」を根拠にして、「通常は皇子だから、人にもってもらい、自分では盛らせてもらえないので、それができてうれしい。」としるし、S㉝は、「旅にしあれば」とわざわざ言うところに、「家の中にとじこめられていやだから、外に出たいという気持」がこめられていると主張する。

その一方で、S㉞は、「盛る」を根拠にしながら、「このような身分の高い人が自分でご飯をもるわけがない。争いがあって家来が死んでしまって暗いのかもしれない。昔の楽しかった頃を思いだしていて、今とちがうじょうきょうだからくらい」とノートにしるす。S㉟は、「草枕」を根拠にしながら、「皇子は位が高いので、ふつうならば他の豪族の館に泊めてもらえるはずが、草を枕にするような旅に出ているので不安」と主張し、S㊱は、「椎の葉に盛る」から、「自分で盛っている。家来がいない。家来もつれてきていない。」、S㊲は、「身分の高い人だったらこんなぼろっちい草の上に飯をのせない。身分の高い人だったら旅に出ても金属の食器などにもる」、S㊳は、「旅に出ていなかったら、家で笥で飯を食べてリッチな気分だが、旅に出れば椎の葉で食べなければならない、最悪だ。〝家にあれば〟は、もし家にいたらということ、後悔（の気持ちがこめられている）、〝笥に盛る〟は、銀の器にもれたのに、後悔（の気持ちがこめられている）」と分析する。S㊴は、「こんな皇族が、草を枕にするなんていうことは、

やっぱりくつじょく的なことなので暗い気持なんだと思う。皇族にとっては、旅なんていうのは縁のないことである。だからきっと、有間皇子は何かやらかしたんだと思う。この有間皇子は、椎の葉なんていう一般人もめったにつかわないようなものをつかわされ、いつもなら盛ってもらっているご飯を自分で盛るから暗い。〝し〟、これは漢字にすると『死』になって、これから有間皇子は死ぬための旅をしていかなければならない、ということをあらわしている」と分析する。S㊵は、小学校時代に読んだ歴史の話を思い出しながら、「有間皇子は、中大兄皇子を討とうとして、味方の家臣に今ならたおせると言われ、むほんをたくらんでいると、その家臣がうらぎり、有間をとらえた。このたびにしあればは、（楽しい）旅ではなく、自分がとらわれていて、処刑にされそうだという意味での旅」としるす。

〔6〕

磐代の浜松が枝を引き結び
真幸くあらばまた還り見ん

一首めの短歌は、「明るい」、「暗い」の決着をつけなかった。謎が残ったままの形にしておきながら、二首めの短歌の学習に入った。「聞き書き」、「漢字化」「辞書をつかわない現代語訳」で右の短歌の表層の読みとりを行った生徒たちは、短歌の中の古語を根拠にしながら、有間皇子の心境を読みとり出す。

S㊵は、「浜松が枝を引き結び」を根拠にして、「松を結んで祈ったのだったら、神だのみをしなければならないほどおいつめられているのかもしれない」、S⑤は、「皇子がねがいごとをするというのは何か大変なことになっている」、S⑥は「真幸くあらば」を根拠にして、「運がよければという意味、何かに対して運がよければといっている。あきらめているような元気のない言い方」、S⑨は、「（裏がえすと）今は不幸な生活を送っている」。「またかえり見ん」を根拠にして、S⑫は、「有間皇子は、もうこの地には帰れないような言葉を言っている」、S⑬は、「もう帰れないかもしれないからこう言っている」と分析する。S⑮は、「また帰ってきたいという願望」と「『真幸くあらば』から、今幸せでないから幸せになりたいという願望」が有間皇子にはあり、彼が「今は全然幸せでない」ことを示しているとノートにしるす。S⑯は、短歌全体を通して、「運がよければ（真幸くあれば）ということは今は不幸、都から遠い岩代にいて長寿をいのり、結び松をまた見たいといっている所から、もうすぐ殺される（ような不幸が来る）のがわかる」と読みとり、S⑱は、「『真幸くあらば』、裏読みすれば今は幸せがこない（状況）、『またかえりみん』、もう帰れないかもしれない（状況）」と読む。「帰って来たいけれど帰れない」、「もう絶対にかえれないわけがある」、「なにかから助かりたい」、「うらないだけでも幸福になりたい」、「もうまじないにしか頼ることのできない自分をなさけなく思っている」というノートが続出する。

自分を処刑するだろう相手の待つ白浜海岸が初めて見える岩代の地。一縷（いちる）の希望を持ちながらも、追いつめられた自分自身の不

安や悲しみを内包した短歌をよまざるをえなかった有間皇子。その立場や状況、心情を、生徒たちは二首の短歌のなかから、一週間の授業の中で読みぬき出している。

S㉕の疑問を手がかりにして有間皇子の謎を秘めた短歌を追究し、「明るい」派、「暗い」派に二分されたクラスの読みとりは、死に向かう不安や悲しみと、それでもなお、わずかな生の可能性を願望する有間皇子の人物形象へと収斂されていった。

〔7〕 古典作文

有間皇子の短歌につづいて「枕草子」を読解した生徒たちは、古典作文に取り組み出す。三行作文（古語を二つ以上つかって、三行以上はしるす作文）から取り組み始めた生徒たちは、やがて原稿用紙三枚をこえる「軍記物語」創作にまで、すすんでいった。紙面の関係上、初期の作文を紹介するにとどめたい。

▼にくきもの、かえりみちのでんしゃのなかでの、ごういんなおばさんなり。ざせきのいとちひさきすきま、めざとにみつけて、じぶんのからだおしこむなり。じぶんなにごともないよふに、しらぬかほしてつぎのえきでおりるなり。

▼悲しき事、それは人はみなおゆらくと言ふことなり。おゆらくは死に近こうなり、それはおそる事なり。われ、おゆらくことはけっして好まぬなり。

▼いとにくきもの、フロにあらわる。あやしげな音たてて、ちかづいてくる。われ、桶を持ち、戦をす。にくきもの、うでめがけてささんとす。われ、それをよけ、はい水に流さんとす。にくきもの死にけり。戦おわりければむなしけり。われいわく、ごりんじゅう……。

▼ふみつきからはづきまでのこの世の景色。木々こい緑の葉をさかしけり。まぶしき日に青き空。すずきし風。夏はよの大好きな季節なり。暑き季節ども、なにか気持ちよきものなり。

▼数　　学

一口に数学といえど、内容多しものなり。異国の語のxやyなどを使ひて魔法のごとく数を算するなり。むかし、算数といふたなり。されど、今は数学となのっているなり。加減乗除にすぎぬがむづかしきものなり。方程式といふものはやく解くことあたはざりき。答えが二つとなりて、三角なきものなり。なので、単簡に満点とることあたはざりき。（以下略）

▼いとにくきもの。テストなるものなり。毎回きまりし時にありて人を困らせるものなり。予それに自由をうばわれ、いとにくきなり。されど、予の師なるものそれをもとに成績をつけしことなれば、予ざえをおこたることあたはざりき。テスト。一口に言葉

にすれどその数、数多にありにけり。人、おのおののざえにより得手、不得手にわかれけり。予の得手なるもの少なしけれど、不得手なるもの少なからずや。いとにくき。

▼我は犬なり。あるじの世話をしなければならぬ。されど、あるじに飯をもらうなり。我には、ひとつ得意なことがあるなり。あたりのにほいが、分かるなり。あるじのにほいも分かりけり。あるじの来たるにほいがすれは、世話をしなければならぬ。（中略）

▼この季節寒さやはらぎ、花共はつぼみをつけるなり。この季節を喜ばぬもの全からず。夏、これ卯月、皐月、水無月のことを申す。この季節の代表は新緑、梅雨であることみな知ってのとほりなり。月の名に注目すれば水無月で昨年のことを思い出せるなり。（以下略）

（くのり・のぶお　京都東山中学教諭）

プリント（Ⓐ）

（6巻57頁）

（5巻198頁）

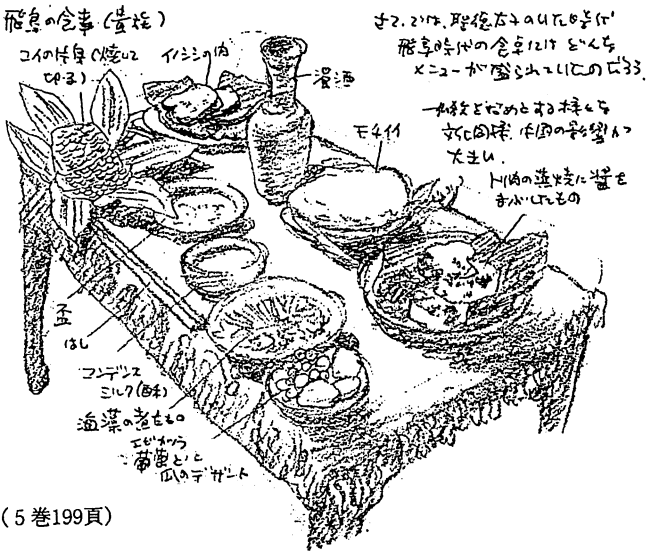
（6巻55頁）

（6巻56頁）

（6巻55頁）

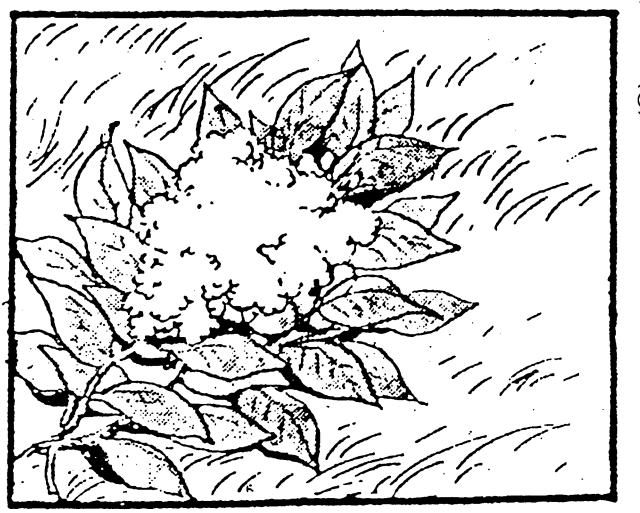
『マンガ日本の歴史』©石森プロ／中央公論社より

プリント（Ⓐ）



（５巻199頁）

プリント（Ⓑ）



（『学習漫画日本の歴史』３巻39頁、集英社）